

下地寛令・清水幾太郎共著『心理学概論』について

——新資料の書誌的情報と成立事情を中心に——

庄司 武史

はじめに

その思想的生涯を「コントに始まりコントに終わる」とも評された社会学者・清水幾太郎（一九〇七—一九八八）の処女作として、ふつう想起されるのは、一九三三年に出版された『社会学批判序説』である。これは、一九三一年に東京帝国大学を卒業した清水の卒業論文をもとにしたコント批判の著作であり、無論、清水単独の執筆による単著である。

しかし、実は清水には、これに先行する事実上の処女作といふべき著作がある。それが、本稿で取り上げる『心理学概論』である（図1）。『社会学批判序説』に四年先立つ一九二九年に出版された。事実上の、というのには、本書が清水と下地寛令という社会学者との共著というかたちをとりながら、清水の自伝によれば、全篇、清水

が執筆したことになっているからである。当時、清水は二十二歳。東京帝国大学文学部社会学科に入学して二年目の、まだ学生であった。

しかし、だからといって本書が、なにか私家版やパンフレットのようにな私的で小さなものであったわけではない。出版社は大学書房、菊判の上製本で布装、出版当時は箱入りであったともいい、巻末の文献目録も含めて一七〇頁におよぶ、しっかりとした体裁と分量を備えた文献である。

よく知られているように、清水は旧制中学校にあった十代半ばには社会学の研究者の道に進むことを決意し、その後、旧制高等学校時代には膨大な人文・社会科学方面の文献を読み漁る早熟な少年であった。大学一年生のときには、早くも日本社会学会の学会誌上で海外の社会科学文献を紹介する欄の執筆を任されている。こうした

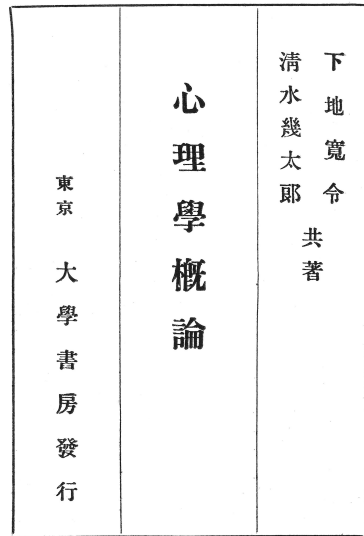


図1 『心理学概論』中表紙（愛知県図書館蔵，縮小，以下全て同じ）

学識を動員して、清水は弱冠二十二歳の身で、しかも必ずしも専門分野ではない心理学の本を書き上げたのである。

清水自身、「誠に面目ないが、単行本としては、これが私の処女作ということになる」と述べている。⁽¹⁾にもかかわらず、いくつかの事情が重なって、この『心理学概論』は、これまで清水研究者の間でも取り上げられたことのない、あったとしても清水が自伝に記した内容を超えない、いわば「幻の処女作」となっていた。本書の人物自体、実はこれまで所在が確認されてこなかったのである。長女の清水禮子（一九三五—二〇〇六）が編んだ『清水幾太郎著作集』（講談社、一九九二年—一九九三年）に本書が収められていないことはいままでもない。

二〇一五年八月、筆者は半ば偶然の機会を得て、本書が愛知県図書館（名古屋市）と岡山県立図書館（岡山市）に所蔵されているこ

とを知り、同年九月から十二月にかけて両図書館に所蔵されている実物を確認した。

本書の所在が確認されたことは、今後の清水幾太郎研究において小さくない意義をもつものと思われる。というのも、上で触れたように清水がかなり早熟な学生であったとはいえ、本書が書かれたのはまだ卒業論文の執筆すらしていない時期であり、当時の彼の思考や関心の程度を量るまとまった資料が不在だったからである。筆者はすでに、旧制高等学校時代の清水の心境を知り得る一文を発掘し、紹介したことがあるが、⁽²⁾本書は分量の上でも、また内容の点からも、清水の思想的生涯における大学前後の時期の分析を充実させる貴重な資料となることが期待される。

本書の確認は、清水に関心をもつ研究者にとって速報性が高い情報と思われる。そこで本稿では、取り急ぎ、今回、新たに確認されたこの『心理学概論』の体裁や構成など、主に書誌的な情報と本書の成立事情に焦点を当てて簡潔に紹介したい。

なお、愛知県図書館所蔵のものと岡山県立図書館所蔵のものとの発行日や刷数などに違いはなく、装幀・体裁など外形上にも目立つた相違はない。

一 体裁および内容

早速、本書の体裁や内容を実物に即してみていきたい。

『清水幾太郎著作集』第十九巻に附された著作目録によれば、本

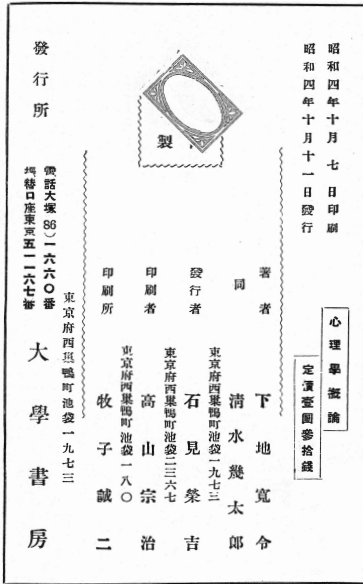


図4 奥付

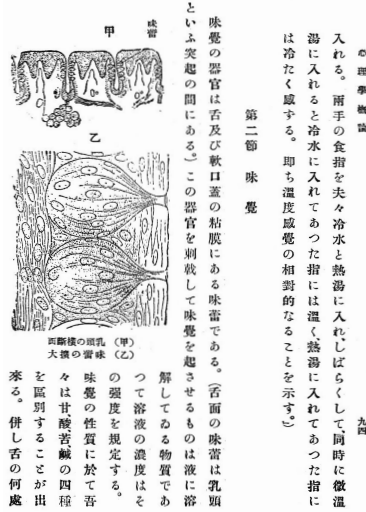


図3 本文中の図版の例 (94頁)



図2 背表紙

書の体裁は「菊判・上製本布装・釘箱入⁽³⁾」である。実物の判型は、縦二二三ミリメートル、横一五七ミリメートルで、概ね菊判に相当している。背の厚さは一九ミリメートルである。愛知、岡山いずれの図書館のものも箱は失われている。

製本の様式は上製本で右綴じ、表紙は布装、色は経年による変化もあるかもしれないがアイボリーに近い色調である。背は丸背でフレキシブル・バック、表紙にはみぞがついている。

背文字は黒字で「心理学概論 下地寛令 清水幾太郎 共著」とあり、四角囲みされている(図2)。表紙にはタイトルなどのいわゆるひらの文字はない。

内容は、中表紙、序、本文、「文献」、奥付の順に編成されている。それぞれの分量は、序は四頁、本文は一六一頁、文献目録である「文献」は一三頁である。

本文の書式は一段の縦書きで、一頁あたり三三三×一四行で組まれている。文字のフォントは明朝体、ただし部、編、章のタイトルの番号のみゴシック体の太字である。文字のポイントは、部のタイトルが一六ポイント、編のタイトルは一四ポイント、章のタイトルおよび本文は一ポイントとなっている。なお、序のみ一頁あたり二五字×一行で明朝体一二ポイントと、本文より多少、ゆとりのある組みとなっている。「文献」は外国語文献を多く列挙しているためか、このみ横書きである。

また、本書には多くの図版が掲載されている(図3)。すべて第三部「精神機能一般」のなかで使用されており、個々の図版に番号

は振られていないものの、内容別では全二十種を数える。ただし、ある事柄の説明に複数の図版を掲げている例が多いため、見た目では二十種より多くの図版が使用されている印象を受ける。なお、これら図版が他の文献等からの転載であるか清水自身が作成したものであるか、判然としないものも多い。

奥付は図4のとおりである。著者名の表記から、本書が下地と清水の共著のかたちであったことが改めて確認できる。発行は昭和四年（一九二九年）十月十一日、発行所（出版社）は、当時、東京府下西巢鴨町池袋一九七三（現在の東京都豊島区池袋本町三丁目二二番地付近にあたり、池袋駅よりも東武東上線・下板橋駅に近い）に所在した大学書房である。奥付からわかる情報と、後述する清水自身の述懐とのあいだに矛盾は見受けられない。

二 構成

本書の本文部分は今三部五編二十七章で構成されている。目次の詳細は以下のとおりである。

第一部	心理学の歴史	第二部	心理学の諸分科
第一編	過去の心理学	第一章	変態心理学
第一章	学問以前	第一節	多様人格
第二章	形而上学的心理学	第二章	差異心理学
第三章	経験的心理学	第一節	個性心理学
		第二節	民族性心理学
		第三章	一般発生心理学
		第四章	動物心理学
		第五章	社会心理学
		第六章	応用心理学
		第一節	医学へ応用
		第二節	法律への応用
		第三節	教育への応用

- 第三部 精神機能一般
 - 第一編 認識
 - 第一章 感覺
 - 第一節 觸覚
 - 第二節 味覚
 - 第三節 嗅覚
 - 第四節 聴覚
 - 第五節 視覚
 - 第六節 一般感覺
 - 第七節 刺激と感覺との關係
 - 第二章 知覚
 - 第一節 知覚の性質
 - 第二節 空間知覚
 - 第三節 時間知覚
 - 第四節 知覚の錯誤
 - 第三章 連合と統覚
 - 第一節 觀念(表象)
 - 第二節 連合的結合
 - 第三節 統覚的結合
 - 第四章 注意
 - 第一節 注意一般
 - 第二節 注意の条件
 - 第四節 実業への応用
- 第三節 二種の注意
- 第四節 注意の範圍持續適応
- 第五編 記憶
 - 第一章 把住
 - 第二節 再生
 - 第三節 記憶一般
 - 第四節 記憶の個人差
 - 第六章 想像
 - 第一節 想像一般
 - 第二節 二種の想像
 - 第七章 思考
 - 第一節 思考の意義
 - 第二節 概念
 - 第三節 判断
 - 第四節 推理
- 第二編 感情
 - 第一章 感情一般
 - 第二節 簡單感情
 - 第一節 簡單感情の三方向
 - 第二節 簡單感情の身体的表出
 - 第三章 複合感情
 - 第一節 複合感情一般とその種類
 - 第二節 普通感情

- 第三節 要素的的感情
- 第四章 情緒と情操
 - 第一節 情緒の性質
 - 第二節 情緒の種類
 - 第三節 情操
- 第三編 意志
 - 第一章 意志
 - 第一節 運動の種類
 - 第二節 意志作用と意志動作
 - 第三節 衝動運動と意志動作
 - 第四節 意志の発展
 - 第二章 作業
 - 第一節 作業とその条件
 - 第二節 作業の内的条件
 - 第三節 作業の外的条件

三 参照された文献

本書の末尾に設けられた「文献」には、参考文献として百三十二種の文献と三十一種の雑誌など逐次刊行物が列挙されている。

それぞれの書かれた言語をみると、文献では百三十二種のうち日本語文献は四十六種で、一方、全体の五分の三にあたる八十六種を占めるのが外国語文献である。その内訳は、英語文献が四十五

種で最も多く、次いでドイツ語文献が三十二種、フランス語文献が九種であった。三十一種の雑誌については、日本語雑誌が二種、英語雑誌が二十種、ドイツ語雑誌が八種、フランス語雑誌が一種であった。なお、これら文献に重複はない。

英語文献として複数の文献が挙げられているのは、イギリスの心理学者W・マクドゥーガル (William McDougall, 1871-1938)、アメリカの哲学者W・ジェームズ (William James, 1842-1910)、アメリカの心理学者E・ソーンダイク (Edward Thorndike, 1874-1949)、同じくJ・ワトソン (John Watson, 1878-1958) などである。ドイツ語文献ではW・ウンント (Wilhelm Wundt, 1832-1920)、F・ブレントノー (Franz Brentano, 1838-1917)、S・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939)、E・フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) らが多い。フランス語文献では、T・A・リボー (Théodule-Armand Ribot, 1839-1916) らの文献が複数、挙げられている。

清水の外国語遍歴はすでに整理したことがあるが、大学二年生までに清水が学んだことがあったのはドイツ語と英語で、ドイツ語教育を重視した旧制の獨逸学協会学校中学に通っていたため、とりわけドイツ語に慣れ親しんでいた。フランス語は、コントを卒業論文のテーマに決めた、この大学二年生の頃に学びはじめたばかりであった。

ちなみに、清水の外国語遍歴において英語文献を本格的に読みはじめたのは、清水の述懐に従えば、この六年ほど後の一九三五年、アメリカの育児雑誌の記事を翻訳する仕事を任されてからのことで

ある。大学二年生当時の清水は英語にほとんど興味がなく、必ずしも十分な英語読解能力も有していなかったはずである。

しかし、以上はあくまで清水の自伝や回想をもとにした整理である。ところが、本書の「文献」を概観して先ず気がつくのは、参照された英語文献・雑誌の多さであろう。無論、その邦訳も読まれてはいるが、当時の清水が、後の自伝や回想で語ったところより、かなり早い時期から英語文献と格闘していた様子がうかがえるのである。しかも、後年の清水にひとつの画期をもたらしたプラグマティズムの古典的大家であるジェームズや、プラグマティズムと親和性が高く、後年の清水も注目した行動主義心理学のワトソンにも、すでに接しているところが注目される。こうした経験と蓄積も、後に改めて英語を読み、プラグマティズムに触れたとき、有益な素養となつたに違いない。

こうした清水の姿は、後年の自伝や回想によるだけではイメージできなかつたものである。参考文献から得た知識を清水がどう咀嚼して、本書の構成要素として活かしていったか、あるいはその解釈の妥当性等の検討は今後の課題であるが、本書がこの時期の清水の姿に、さらなる精彩を加えていく可能性は高いように思われる。

四 本書の成立事情

ここからは、本書の成立事情を清水の自伝を中心に整理しておく。共著者である下地寛令の述懐も確認したいところであるが、後

述するように、清水の大学の先輩であつたというこの社会学者は、あまり多くの著述を残さないまま一九三八年に早逝したらしく、そのあたりを確認することは現時点では困難である。

さて、『心理学概論』は、清水がこの下地の依頼を受けて書いたものであるという。

清水の自伝として有名な三部作（『私の読書と人生』『私の心の遍歴』『わが人生の断片』）のうち、最も早く成立した『私の読書と人生』（一九四九年）には次のようにある。

大学の二年生の夏、二十日間ばかり、私は上野の図書館へ通いつめた。「心理学概論」を書くためである。社会学科の先輩に下地寛令という人がいて、当時内務省の警察講習所で警官相手に心理学を教えていた。下地さんは講義用の教科書の作製を私に依頼した。それまでの私は心理学に対して何の興味も持っていなかつた。（中略）私は完成の後に百円の謝礼を貰うことになつていた。⁵⁾

一九五六年の『私の心の遍歴』では、こうである。

私より十年近く年長の先輩で、当時、九段の警察講習所という巡査の養成機関の先生をしている人がおりました。専攻は社会学なのですが、この講習所では心理学の講義をしていました。その人が、私に向つて、心理学の教科書を書いてくれないか、

と頼むのです。お礼は百円上げる、と言うのです。(中略)けれども、気持の上では、欲得すくではなく、心理学への興味が新しく湧き上がって来たように感じていました。⁶⁾

右では、なぜか下地の名前が伏せられているが、『私の読書と人生』と並べれば、「その人」が下地を指していることは明白だろう。さらに後年の『わが人生の断片』(一九七五年)にも次のようにあって、自伝三部作の間で、清水の記憶や述懐の内容にそう大きな違いはないことがわかる。⁷⁾

その頃、下地さんは、麹町にある警察講習所で心理学を教えた。或いは、急に心理学を教えることになったのかとも思う。頼みたいことがある、と言うので、麻布本村町のお宅へ伺ってみると、大至急、心理学の教科書を書いてくれないか、という注文である。お礼は百円と約束してくれた。私は引受けた。引受けたのは、百円が欲しかったからという理由が大きい⁸⁾が、心理学に対する未練という理由もあったように思う。

以上からわかる『心理学概論』成立のポイントは、以下の二点に整理できるだろう。

第一に、それは清水の意思ではじめられたものではなかったということがある。清水の心理学への関心さえ決して前向きなものではなく、むしろ百円の報酬の方に魅力を感じている。本稿では詳説を

見送るが、当時の清水の生活は、生家の家業が傾いたためもあって厳しいものがあり、清水自身、様々な仕事をかけもちしながら大卒に通う毎日であった。報酬の魅力という動機は領けないものではない。

しかし、同時に、こうした清水自身の言葉とは裏腹に、清水に心理学への関心や素養がまったくないわけでもなかったことにも注意を払わなければならない。というのも、上で引いた『私の読書と人生』などによれば、すでに高等学校時代にはヴントやブレントナー、フロイトといった心理学方面の文献にも目をとおしていたし、心理学の方法とも親和するジンメルの形式社会学にはとくに深い関心を寄せていたからである。「心理学は、もつと面白い学問である筈ではないか。そういう期待は、外国の社会学文献に現れる心理学上の成果に触れているうちに、私の内部に自然に生れたものである⁹⁾」と清水は述べている。

こうした心情は、心理学者・松本亦太郎(一八六五—一九四三)の『心理学講話』(一九二三年)をテキストとした高等学校での講義、そして松本の弟子で『心理学概論』(一九三一年)などを著した心理学者・増田惟茂(一八八三—一九三三)の大学での講義をとおして、一層、高められたようである。「心理学は面白くなくても、こちらが打ち込んで勉強してみたら、本当の面白さが出て来るのではないか」、「わが人生の断片」のなかで、清水はこうした心情を報酬に惹かれた自分への「弁解」と表現しているが、自ら書いた『心理学概論』により近い時期の『私の読書と人生』でも、心理学の勉

強を「少し始めて見ると、忽ち面白くなってしまった¹¹⁾」と述懐しているから、執筆以前に蓄積していた心理学への関心や素養が、執筆を進める動機として作用していた様子がうかがえるのである。

そして、それは『心理学概論』の執筆を終えると同時に失われてしまったものでもなかった。『私の心の遍歴』や『わが人生の断片』でも、本書の執筆が清水自身にもたらしたものについて語られている。後者では「私の手に入ったのは、心理学への新しい興味だけであつた¹²⁾」と控えめであるが、前者では次のように、より具体的に、かつ感激を込めて語っているのである。

それと同時に、心理学という学問に対する関心が私から離れなくなりました。これも大きな利益と言えらると思います。前に述べたオーギュスト・コントの学説の一面である「人間性の実証的理論」の持つ意味を悟るになつたのも、『心理学概論』で苦勞したお蔭でしようし、後年、アメリカの心理学乃至社会心理学に勉強の手を伸ばして、これを頼りにして社会学の諸問題を考え直すようになったのも、そのお蔭です。戦後、『社会心理学』（岩波全書）を書いて、一人前の社会心理学者のように待遇されるようになったのも、同じく、そのお蔭と申すべきであります¹³⁾。

本稿の冒頭でも紹介したように、清水の思想的生涯を考える上でコントの存在感は基礎的なものであるし、さらにここでいわれる

「アメリカの心理学乃至社会心理学」も、清水においてはコントと並んで重要な、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) とプラグマティズムの思想を入口として手を伸ばしていったものである。清水の回想に従うならば、本書『心理学概論』はやがてコントやデューイという清水思想の大きな二本の柱へと接続されていく。本書が、そうした清水思想の初期的様相をうかがい得る資料として高い価値を有していると考えられる所以である。

五 警察講習所の教科書として

第二に、本書が内務省警察講習所の教科書として作成されたという事情である。このことは、本書がその後、長く所在不明になつたことと無関係ではないように思う。

警察講習所は、一九一八年、勅令第一五五号をもとに内務大臣の指揮監督下に設置された警察官の養成施設である¹⁴⁾。しかし、その前身といえる警官練習所（一八八五年—一八八九年）、警察監獄学校（一八九九年—一九〇四年）、警察官練習所（一九〇九年—一九一八年）が、どちらかといえば現場の警察官に必要な教養・術技を教授する場であつたのに対し、警察講習所はそれらに加え、警察精神の涵養をもつて、拡大・発展する社会・時代の要請に応え得る警察幹部を養成する場として期待されていた。警察講習所はその後、幾度かの廃止論議も乗り越え、結果的には第二次世界大戦終結後の一九四六年、中央警察学校（後の警察大学校）の設立まで存続する。大

日本帝国下の内国治安維持を担う警察体制の一翼として警察講習所が示していた存在感がうかがえる。

警察講習所の本科生として入所資格を有するのは、二年以上、警察の実務に従事して心身強健なもので、かついくつかの要件を満たしているものである。そして、このうちとくに庁府県長官の推薦を得たものが実際に入所できた（一九三〇年以降は当時の中華民国やいわゆる満州国からの留学生も受け入れている）。一九一八年度の第一期生から一九四六年度の第三十七期生まで合計でおよそ五、三〇〇名が学んでいる。

本科生の講習期間は「警察講習所規程」（一九一八年制定）によれば一ケ年、ただし、別に定められていた「警察講習所規則」（同年制定）によれば「当分ノ内十ヶ月トス」とあり、一九三六年にさらに六ヶ月に短縮されるまでの各期の講習期間をみると、実際の講習期間は八ヶ月が最も多かったことがわかる。なお、『心理学概論』が発行された一九二九年度には、第十五期生一三七名が学んでおり、この期の講習期間は一九二九年四月から一九三〇年三月まで、規程どおりの一ケ年という数少ない例である。この第十五期生以降の講習生が、『心理学概論』を教科書にして学んだ世代といえるであろう。

このことは、本書の発行部数の問題を推測させるひとつの材料になる。第十五期から第三十七期までの講習生の合計はおよそ三、五〇〇名。ただ、これだけの学生が皆、本書を教科書としたのか、いまいかえれば本書の出版部数も累計でそれに近くなるのかといえは、

必ずしもそうではないようなのである。

警察講習所には、さきに挙げた「警察講習所規定」に沿って、「犯罪心理」に類する科目が設置当初から置かれていた（「心理学」や「心理学概論」ではない）。ちなみに、設置された一九一八年度の科目「犯罪心理」は、東京帝国大学出身の犯罪心理学者・寺田精一（一八八四—一九二二）が担当している。翌一九一九年度に寺田が講習生に課した試験問題の記録が残っているが、それからみるに寺田の「犯罪心理」講義には多分に社会学、ないしは社会心理学に近い内容も含まれていたようである。寺田は一九二二年九月、第五期生講習中に亡くなったが、こうした背景が一九二九年に至って社会学出身の下地が心理学の講義に関わることができた一因だったのかもしれない。下地は、心理学を担当するより前に、すでに社会学の科目も担当していた。しかし、下地が担当した科目が「犯罪心理」であったのか「心理学」「心理学概論」などであったのかは、当時の教授科目資料がないため、現時点では不明である。

しかし、後述するように、下地は一九三二年四月から東京府の府立高等学校教授となる。後任は明らかでなく、同年からはじまった第十七期生一八四名への心理学の講義がどのようなかたちで行われたかも判然としない。翌一九三三年度の第十八期からは、中村翁（生没年不詳）という医学士、文学士の経歴をもつ人物が「犯罪心理学」を担当している。本書が書かれた経緯を考えれば、あるいは中村も自分で教科書を用意したかもしれない。

したがって、下地が『心理学概論』を教科書として使用したと、

ある程度の確度で推測し得るのは、一九二九年度の第十五期一三七名と、翌一九三〇年度の第十六期（一九三〇年四月―一九三一年三月）一四七名のみなのである。第十五期生、第十六期生の合計二八四名、詳細不明の第十七期生が本書を使用したと仮定しても計四六八名である。教科書としての本書の発行部数は、概ねこの程度の規模であったと推測できるのではないだろうか。出版社の大学書房が本書を一般向けにも販売したかどうかは不明であるが、成立事情の特殊性や今日の残存状況を考えると、やはり一般向けには販売されなかったか、されたとしてもごく少数にとどまったのではなかったであろうか。

こうした発行部数の少なさも、やがて本書が散逸していくひとつの背景だったものと考えられる。さらに、本書が戦前体制における警察機構に関係するという特殊な成立事情を有していただけに、その後、おそらくとくに戦後の混乱のなかで姿を消していったものと思われる。¹⁵

二〇一六年五月現在、本書は国立国会図書館にも所蔵がなく、国立情報学研究所が整備する「NII学術情報ナビゲータ」(CiNii)の検索でもヒットしない。現在、確認できるのは、愛知県図書館および岡山県立図書館に所蔵されている二冊のみなのである。

なお、補足ではあるが、清水は太平洋戦争がはじまる直前の一九四一年七月、読売新聞社の論説委員に招かれた。招いたのは当時、同社主筆だった高橋雄豺（一八八九―一九七九）である。高橋は長く警察官を務め、一九一五年にはさきに挙げた警察官練習所も卒

業、やがて内務官僚として警察講習所にも関係した。清水と高橋との関係には、あるいはこうした縁もあったのかもしれない。

六 共著者・下地（井上）寛令について

ところで、本書の共著者である下地寛令とはどのような人物だったのだろうか。

実は、この人物についても、あまり多くのことは伝わっていない。近現代日本の社会学者一四〇名あまりの小伝を収めた『近代日本社会学者小伝―書誌的考察』（一九九八年）にも記載はない。『社会学伝来考―明治・大正・昭和の日本社会学史』（二〇一一年）において、取り上げた人物については「どのような経歴の人かよくわからぬ」と記しており、生没年にすら言及していない。¹⁶より詳細な来歴の整理は今後を期すとして、ここでは清水の自伝およびいくつかの既存資料から判明している範囲を簡潔に紹介しておきたい。

現在のところ、下地の正確な生年が判明する資料は見当たらないが、さきに引用した清水の述懐によれば一九〇七年生まれの清水より十年近く年長であるらしく、そうであるならば、下地は一八九〇年代半ばの生まれということになる。一八九五年生まれの林恵海や加田哲二、一八九六年生まれの本田喜代治などが同年代ということになるだろうか。また、出身地も明らかではない。

大学は東京帝国大学文学部社会学科で、したがって清水の先輩に

あたる。社会意識研究や社会教育学などを専門とした綿貫哲雄（一八八五—一九七二）にも師事したらしい。清水に七年先立つ一九二四年（大正十三年）三月に卒業。卒業論文の題目は「社会事実の概念について」¹⁷。

卒業後も、所属していた日本社会学会の例会、研究会などには頻りに参加していた様子が記録からうかがえる。¹⁸一九二八年に東京帝国大学に入学した清水とも、この頃からしばしば顔を合わせていたようである。

そして、卒業後の下地が関わっていたのが、『心理学概論』の成立事情と関わる警察講習所であった。また、当時、浅草にあった東京市立女子実科学学校の講師も務めていたらしい。下地が東京府の府立高等学校に移った際、その職は清水に譲られたからである。¹⁹

一九二九年（昭和四年）七月、処女作『社会学概論』出版。「序」によると、本書も下地が警察講習所での講義で配布したプリントがもとであるという。同年十月、本稿で紹介している『心理学概論』を清水との共著で出版。

一九三一年（昭和六年）三月、『融和問題の社会心理学的研究』出版。同年四月より府立高等学校教授。同校ははじめ麹町区永田町に所在したが、一九三二年（昭和七年）に目黒区八雲に移転した。『心理学概論』の頃、下地は麻布区本村町に住んでいたが、学校に移転に合わせたのか、この頃には世田谷区新町に居所を構えている。一九三二年から一九三四年（昭和九年）まで同校水泳部の顧問ないし部長を務めた。²¹ また、一九三三年度には法政大学予科講師と

して講義「修身」も担当している。²²

一九三四年十二月に発行された日本社会学会の学会誌『年報社会学』第二輯の「学会彙報」欄には、「下地寛令氏……道德社会学研究のため来春渡仏される由。」との消息が掲載されている。²³ この消息が正しければ翌一九三五年（昭和十年）から、後掲する下地の訃報記事が正しければ一九三四年から、終わりは共通して一九三六年（昭和十一年）まで、府立高等学校教授のままヨーロッパに留学、フランスやドイツなどを訪れている。パリ滞在中には、日本社会学史に関心を寄せたアメリカの社会学者ハワード・ベッカー（Howard P. Becker, 1889-1960）に、日本社会学会の欧文パンフレット「日本社会学の沿革 Sociology Past and Present in Japan」を提示するなど便宜を図ったらしい。²⁴

一九三五年十二月発行の『年報社会学』第三輯の「学会彙報」欄には、「○独逸学界の近況——在ベルリン井上寛令氏より松本潤一郎氏宛本年十月十六日附私信より——」と題された長文の消息記事が載っている。²⁵ ここでは、ナチスによる学問への圧力、ユダヤ人学者への迫害が度を加え、ドイツの学界は気兼ねや迎合の空気に支配され、相当な息苦しさのなかにあることがナチスへの嫌悪感とともに語られている。

なお、『年報社会学』第二輯の記事の表題と第三輯のそれからうかがえるように、一九三四年から一九三五年の間に氏名が「下地寛令」から「井上寛令」に変わっている。あるいは渡欧を前に井上家に入るかたちで結婚したのかもしれないが、詳しい事情は不明であ

る（煩雑を避けるため、本稿では「下地」で表記している）。

一九三六年春頃帰国。同年七月より日本社会学会理事として学会本部事務全般を主宰したという。

一九三七年（昭和十二年）より法政大学高等商業部講師も兼務して、社会学者の樺俊雄（一九〇四—一九八〇）らとともに講義「国民道徳」を担当した。⁽²⁶⁾

ところが、翌一九三八年（昭和十三年）十二月発行の『年報社会学』第六輯の「学会報告」欄に、突如、「井上寛令氏逝去」の訃報が載るのである。⁽²⁷⁾これによると、下地は一九三八年三月中旬に発病して入院し、一時、小康を得たものの同年八月七日に亡くなった。四十数年の享年であった。

同欄によると、その直後の十月二十日午後六時より東京帝国大学山上御殿で開催された日本社会学会の研究例会は、下地の追悼会でもあった。当時、東京文理科大学（現在の筑波大学）教授となっていた綿貫哲雄と、当時、府立高等学校教授で、戦後、大阪大学教授となった心理学者の橘覺勝（一九〇〇—一九七八）が追悼の辞を述べている。橘が追悼の辞を述べたのは、職場の同僚であったからもあるだろうが、やはり心理学の縁もあつたのだろうか。いずれにしても、下地は恩師や同輩からも将来を囑望されていたのだろう。遺族の来席もあつたとあり、続柄は不明であるが、同欄に記録されている井上美代子と井上寛明の両氏がそれと思われる。

ただ、この記録による限り、清水の出席がないのがやや奇異に映るところである。この頃、清水は後藤隆之助（一八八八—一九八

四）の国策団体・昭和研究会に加わって、三木清（一八九七—一九四五）らとともに、翌年一月に発表されるはずの、いわゆる東亜協同体論に関わる文書策定の詰め協議に関わっていたから、とりわけ多忙だったとも考えられる。ちなみに、清水は『わが人生の断片』のなかで、下地が「昭和十五年の夏、急逝した」と記しているが、昭和十三年逝去と伝える『年報社会学』の記事が正しければ、これは清水の記憶違いかもしれない。

なお、下地には上で挙げた以外の業績もある。一九三一年に『第三インターナショナルの国家政策』、翌一九三二年には『ヨーロッパに於けるファシズム』（いずれも中央報徳会）という海外の小冊子を翻訳出版したほか（前者を実際に翻訳したのは清水だったらしい）、⁽²⁹⁾絶筆となった論文「道徳社会学の立場」（『年報社会学』第五輯秋季号、一九三八年四月）など、いくつかの研究が学会誌に発表されている。また、上で触れた日本社会学会の欧文パンフレット「日本社会学の沿革」の製作、海外の大学への寄贈にも尽力したようである。⁽³⁰⁾しかし、いずれの仕事もその後は絶版となり、古書として以外、現在には伝わっていない。

しかも、下地は上でみたとおり若くして亡くなったためか、自らの生涯などについて回顧したような文章は見当たらず、そのことも、下地に関する経歴の多くを不詳にしてきた背景であったと思われる。

おわりに

以上、本稿では『心理学概論』の体裁や構成を紹介したほか、本書の成立事情を清水、下地、そして警察講習所を介して簡潔に紹介してきた。これらの関係は、今後、本書を清水の思想的生涯のなかに位置づけていく際の基本的な背景と思われるためである。清水と本書をめぐる文脈において、清水とそれなりの関係をもった下地という人物、そして本書の成立事情の中核をなす警察講習所そのものについても、過去、ほとんど整理されてこなかったという反省もあった。

最後に、本書の所在が確認された経緯を簡単に記しておきたい。

繰り返しになるが、本書の所在は長く不明であった。筆者自身、十年以上にわたって国立国会図書館をはじめとする公立図書館や警察大学校、また、清水と所縁のある大学はもちろん、全国の大学付属図書館の所蔵を確認し、古書店やインターネットサイトなどでも検索を重ねてきた。⁽⁴⁾

二〇一五年八月に国会図書館の協力もあって、半ば偶然に本書の所在が確認されたのは、国会図書館が整備する全国図書館の横断検索システムにヒットするかたちで、愛知県図書館と岡山県立図書館の書誌データが更新されたためである。

本書を収蔵した詳細な経緯については、いずれの図書館からも明確な回答が得られなかったが、たとえば愛知県図書館所蔵のものの場合、現在は廃止された別の収蔵場所から移転されたものらしいと

のことである。

二〇一六年五月現在、本書は愛知県図書館および岡山県立図書館に収蔵されており、一般の利用も可能な状態である。今後、本書の内容に係る詳細な検討をとおして、青年時代の清水がどのような関心や学識を有していたのか、また、本書の執筆がその後の歩みにもたらしたものなど、多くの発見が得られることを期待したい。

附記

本稿の執筆にあたり、資料の検索に協力くださった国立国会図書館、所蔵資料の閲覧と撮影に便宜を図ってくださり、写真の掲載も承諾くださった愛知県図書館および岡山県立図書館、撮影に協力くださった法政大学図書館と法政大学史センターの古俣達郎氏、また写真の掲載を快諾くださった清水真木氏に謝意を表す。

なお、共著者である下地（井上）寛令の著作権の所在は確認できていない。本文中、下地の遺族と思われる二氏の氏名を挙げたが、現在、両氏の足跡は途絶えているらしく、国会図書館でも下地の著作物は著作権者不明の扱いとなっている。関係される方がいれば、ご教示いただければ幸いである。

註

- (1) 清水幾太郎、一九七五、『わが人生の断片』（『清水幾太郎著作集』第十四巻、講談社、一九九三）、二四五頁。
- (2) 庄司武史、二〇一五、『清水幾太郎―異彩の学匠の思想と実践』、ミネルヴァ書房、三〇―三二頁。
- (3) 『清水幾太郎著作集』第十九巻（講談社、一九九三）に附された「著作目録」参照（三九〇頁）。
- (4) 庄司前掲、三三二―三三四頁。
- (5) 清水幾太郎、一九四九、『私の読書と人生』（『清水幾太郎著作集』第六巻、講談社、一九九二）、四二九―四三〇頁。

- (6) 清水幾太郎、一九五六、『私の心の遍歴』（清水幾太郎著作集）第十巻、講談社、一九九二、三八三頁。
- (7) 逆にいえば、過去、本書に触れようとした清水論では、こうした述懐を資料とするほかなかったといえる。たとえば、天野恵一（一九四八）による以下の言及も、清水の述懐の整理を超えていないことがわかるだろう。「清水は『社会学批判序説』以前に、内務省の警察講習所で心理学を教えていた社会学科の先輩である下地寛令に講義用の教科書の作製を依頼され、『心理学概論』（一九二九年）を書いたらしい。下地との共著という形式で出版されたものであるとはいえ、厳密に言えばこの巡査のためのテキストが彼の単行本の処女作である」（天野恵一、一九七九、『危機のイデオロギー―清水幾太郎批判』、批評社、四九頁）。
- (8) 清水一九七五著作集十四前掲、二四五頁。
- (9) 同右、二四五頁。
- (10) 同右、二四五頁。
- (11) 清水一九四九著作集六前掲、四二九―四三〇頁。
- (12) 清水一九七五著作集十四前掲、二四六頁。
- (13) 清水一九五六著作集十前掲、三八四―三八五頁。
- (14) わが国の警察官および警察幹部の養成史については、警察大学校史編さん委員会、一九八五、『警察大学校史―幹部教育百年の歩み』（非売品）に詳しい。警察講習所については同書四三―一三三頁で詳しく取り上げられており、本稿の以下の整理も専らこれに拠っている。なお、制度の上では消防官も講習生になることができたが、実際にはほとんどが警察官出身であった。また、校舎は、清水や下地が関係していた当時は麴町区三番町六番地（現在の千代田区三番町六番地で、警察庁科学警察研究所の旧所在地、二松學舎大学九段キャンパスの裏手）に所在した。
- (15) 本書は警察大学校に附属する図書館にも所蔵がない。麴町区に所在した警察講習所の校舎は一九四五年三月十日の東京大空襲で焼失したが、その際に失われたのかもしれない。
- (16) 宮永孝、二〇一一、『社会学伝来考―明治・大正・昭和の日本社会学史』、角川学芸出版、五〇五頁。
- (17) 東京大学文学部社会学研究室開室五十周年記念事業実行委員会、一九五四、『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』（非売品）、七九頁。
- (18) 東京大学文学部社会学科／大学院人文社会学系研究科一〇〇周年記念誌刊行委員会、二〇〇四、『社会学研究室の一〇〇年』（非売品）、四二六頁以下。
- (19) 清水一九五六著作集十前掲、三八九頁。
- (20) 下地寛令、一九二九、『社会学概論』、良書普及会、序。
- (21) 旧制府立高校―旧制都立高校―東京都立大学附属高等学校―校修館中等教育学校水泳部OB・OG会「黒潮会」公式サイト（<http://www.kuroshikane/archives/archives.html>）。最終閲覧二〇一六年五月九日。
- (22) 法政大学大学史資料委員会編、一九九一、『法政大学史資料集』第四集、一九一頁。ただし、おそらく後述する渡欧のため、下地がこの科目を担当したのは同年度だけである（法政大学校友会編、『法政大学報』一九三四年―一九三七年各号）。
- (23) 日本社会学会編、一九三四、『年報社会学』第二輯、岩波書店、四一五頁。
- (24) 日本社会学会編、一九三五、『年報社会学』第三輯、岩波書店、三五八頁。
- (25) 『年報社会学』第三輯前掲、三五九―三六二頁。傍点原文。
- (26) 『法政大学史資料集』第十四集前掲、二二九頁。
- (27) この記事自体、過去、参照された形跡がほとんどない。参考のため全文を紹介したい。
- 「一、井上寛令氏逝去。
- 去る昭和十一年七月以来本学会理事として多大の功績あつた井上寛令氏は、本年三月中旬発病入院せられ、其後一時小康を得られたが、八月七日病勢遽かに革まり逝去せられた。氏は大正十三年東大社会科（ママ）卒業、昭和六年以来府立高校教授、昭和九年より十一年まで主としてフランス、ドイツ等に遊学、帰朝後本学会理事に就任、黒川理事と共に学会本部事務一般を主宰された。殊に昨夏支那事変勃発と共に黒川理事出征せられし後は、殆ど氏単独にて一切を処理せられた。著書には、『社会学概論』（昭和四年）、『融和問題の社会心理学的研究』（昭和六年）等あり、外遊前後より専ら道德社会学の方面を研究せられた。本年報前号に寄稿されし『道德社会学の立場』は氏の絶筆となつたのである。氏の逝去は単に本学会のみならず我国社会学界の損失である。謹みて此処

- に追悼の意を表したい。」(日本社会学会編、一九三八、『年報社会学』第六輯、岩波書店、二〇二頁。)
- (28) 清水一九七五『著作集十四前掲、二四五頁。
- (29) 『清水幾太郎著作集』第十九卷「著作目録」、三九〇頁。
- (30) 『年報社会学』第六輯前掲、二〇三頁。
- (31) この間、清水の親族に所在を確認してきたことはない。